

朝と比べて、帰り道はなんて楽なんだろう！自転車通学は頭を使う。全ては遅刻をしないため、最短で学校に辿り着くため。この道も三年目になれば、どの木を通過した時に加速すれば信号に引っかからないですむか、どの地点で歩道に乗りあげれば車を気にせず走れるか、が身に染み付いてくる。自転車だって野球と一緒に、大切なのは緩急。加速すれば間に合う信号もあるし、どう急いで漕いだって毎朝必ず引っかかる信号もある。平均三十分の道のりの中で、いかに疲れずに自転車を漕げるかが毎朝の自分の任務だ。

道先でカンカンと踏切の閉まる音が聞こえる。あの踏切は、本当に嫌いだ。朝の七時二十九分を過ぎると、あそこは十五分間開かなくなる。その境目までに渡れなければ、どう足掻いても遅刻が確定してしまう。この踏切さえ開けば、と思いながら開かない遮断機の前に立ちすくみ、点滅をやめない赤いランプを睨みつけるあの時間ほど嫌なものはない。

右手首の時計をちらっと確認する、現在十七時五十分。踏切がいくら閉まろうが、信号が何度赤になろうが、部活終わりの身体を無理して動かす必要は全くない。それに、今日はコーチの岡村さんがアイス差し入れてくれた。いつもより腹が減っていない、ゆっくり帰れる。

踏切待ちの車の眼前をつつき、騒々しく点滅を赤いランプの足元で自転車を停止させる。ふと、岡村コーチが去年の今頃もアイスの差し入れをしていたことを思い出した。あれは一つ上の先輩の引退試合前だった。自分たちも、二週間後に引退試合を控えている。一気に、不安と解放感とが混ざった、もどかしい気分の悪さを感じた。

きっと、高校卒業後は野球を続けられないだろう。小学生から続けてきた野球の締めくくりが二週間後に迫っている。はっきりいって、高校野球は惰性だった。中学の時はレギュラー争いが激しく、監督は厳しくて、向上心が求められ努力することが当たり前だった。結局、万年ベンチから抜け出せなかったことは悔しいが、後悔はしていない。あの時、自分は確かに仲間の一人だった。もしかすると、高校野球をひどく生ぬるく感じるのはそのせいかもしれない。

地鳴りのような金属音が、段々と近づいてくる。音が大きく、高くなり、目の前を赤と青の線が交じった銀色が通っていく。行く手を塞ぐそれは乗り物と言うより壁のようで、強い風は遮断棒をゆらゆらと上下に揺すった。

先月の地区予選だってそうだ。表をなんとか三者凡退に抑えられた七回裏の攻撃、ここで一点、一点さえとればまだ試合が続けられる、そんな場面。暑さで士気が下がっているのは、さっきの回に投げながら感じていた。自分も、暑さでおかしくなりそうだった。だけど、だからこそ今ベンチから声を出さなくては、自分が精一杯応援をしなくては。勝てるかもしれないんだ。ひゅっと空気を吸い込み、腹にためる。日に焼けてヒリヒリと熱を持った唇が微かに痛んだ。その時、自分の左肩甲骨の辺りに手の平の暖かい重みを感じた。見ると、キ

キャッチャーのヒロが隣に立っていた。

「お前、この回無理して応援すんなよ。次も投げるんだから。」

ゆっくり息を吐き出す。力んでいた背中から力が抜けていった。

「そうする。」

ヒロはバッターボックスを見つめたまま、軽く頷いた。自分も、ヒロ越しにバッターを確認する。

バッターが外野を狙った大きなテイクバックを作ると同時に、ピッチャーは投球動作に入った。キャッチャーのミットがぐいと持ち上がる。一球目、ボール。

「シャワー入りてえ。」

と、右隣できのしーが呟く声がした。驚いて振り向く。するとムラニシが、低く声を漏らした。

「この回で点が取れなかったら、コールド負け？」

きのしーが頷いて続ける。

「片付けとかで一時間以上かかるから、今日も帰りは六時過ぎだな。」

「まじかよ。」

まじかよ、はこっちだ。自分の中に、マウンドに立つために抑えていたはずのものが込み上げてくる。今は試合中だ、なのに帰りの話をするのか。野球をしているんだ、暑いのは当たり前じゃないか。さっきの回は三者凡退にできたんだ、今は流れにのれる大事な場面なんだみんなだって分かっているはずじゃないか。それなのに、どうして今それを言う？ どうして今それを俺の隣で言うんだ？

万年ベンチだった頃、いつもマウンドばかりを見ていた。チームを背負う正規ピッチャーは一体どんな気持ちであそこに立っているんだろう、と。誇らしさ？それとも、恐怖か。このチームで正規投手の座を手に入れても、その答えは見つけれない。自分は、高校の野球部を心から誇れたことがない。そして同時に、それが寂しい。

踏切の赤いランプはまだ点滅している。線路の向こう側に、自分と同じクラブバックを背負って歩く二人が見えた。ここら辺に最寄り駅がある部員は……恐らくヒロと村西だろう。二人の背中を見つめていると、どことなく疎外感を感じた。仲がいい同級生、仲がいい先輩と後輩。自分には、そう言える人が思い当たらない。仲間との間に壁を感じる。話かけると、互いにどこかぎこちない気がしてならない。試合中に選手としてだけでなく、普段の練習や休憩時間の時にもっと、自分に話題を降って欲しい自分を中心に盛り上げたい……自分を必要として欲しい。そう思う度、また寂しくなる。

ジジジジ、と黄色と黒のバーが上に動いた。自転車をゆっくり漕ぎ出す。普段なら、今ヒロと村西が歩いている並木道を真っ直ぐ行くが、住宅街の方から大回りをして二人を追い抜かすことにした。ふっと、今日の投球練習中、ヒロに言われたことを思い出す。

「やっぱ佐竹って、ピッチャー向きじゃないよな。」

突然の言葉に思わずシャドーの動きが止まった。

思い、当たらずともない。ただ、引退前のこの時期にキャッチャーであるこいつがわざわざ指摘するほど自分は、足りていないのか？

「そうかな。」

ヒロは口元についた砂を手の甲でぐいっと拭い、

「うん。」

と言った。目の前にいる相手が何を踏まえてそう思ったか、そしてどうしてそれを自分に伝えたのかが分からない。発言の意図は？

「ヒロは、キャッチャーに向いてると思うよ。」

そう返すだけで精一杯だった。

いつだって二人で試合をしてきた。自分とヒロは、かなりいいバッテリーだと思う。試合後、審判や敵監督に「君たちだけなら区内トップレベルだね。」と言ってもらえることが度々ある。それに、ヒロに投げるのを怖いと感じたことはほぼない。マウンドから、あいつのグローブを見ると安心する。そこに立つバッターが、打つ役割を担っていることさえ忘れてしまいそうになる。自分はヒロに投げるのが好きだ。確かめたことはないが、もし、ヒロが自分の球を受けるのが好きだと感じてくれていたら、嬉しい。

だから尚更、今日の発言は何だったのだろう。いや、少なくとも技術の面では、自分はチームに貢献できているはずだ。だとしたら、精神的なこととしか考えられない。確かに、感情的になりやすい方だとは思ふ。でも、冷静さを欠きそうになっても、自信をなくしそうになっても、ヒロが何か声をかけてくれて、プレー中なら合図を送ってくれて、それでいつも自分は最後まで、責任を放り出さずに投げきってきた。……もしかしたら、それがいけなかったのかもしれない。自分はヒロにとって負担だったのか？ どうしてもそれを言わなきゃならないほど苦痛に感じていたということか？ ヒロはずっとそう思いながら、自分と組んでいたのだろうか。

白い線の近くまでのり出して停めてある赤い車をギリギリで避ける。煉瓦造りの塀が幾つか続く。この人通りも車も少ない道が、自転車を加速するよう誘発させる。

村西と並んで歩くヒロの後ろ姿を思い出した。自分はヒロと、あんな風に話をするのがあったらどうか。二人で話している時に、一度もあいつが大笑いしている所を見たことがない。ヒロにとって、自分は何だろう。会話していても楽しくない、ピッチャーとしても認められていないとしたら、自分はただの“部員”じゃないか。そんな、三年間一緒に野球をしてきただけの……時間が積み上げただけの存在なんて、俺は嫌だ。

ふと目に入ったカーブミラーに車が映った、急いでブレーキを思いっきり握る。自転車は細い十字路に差しかかるギリギリで降り、白いワゴン車はクラクションのうるさい音を鳴らして目の前を通り過ぎた。息があがっていて、いつの間にか自分が自転車を速く漕ぎすぎた気がつく。なんだか拍子抜けしてしまった。再び、ゆっくり漕ぎ出す。

二つ並んだ自動販売機を境に、住宅街が終わり、線路沿いの少し広めの道に出た。チラと後ろを振り返る、もちろんヒロ達の姿は見えない。

自分はこの道が好きだ。周りに高い建物がなく、視界が開けていて空も電車の架線もずっと向こうまで続いていると感じられて気持ちがいい。特にこの時期、夏の夕頃は、ちょうど沈みかけた太陽が道の先に見える。頭上で展開されるピンクと深い青が混ざったシャボン玉のような夕焼け空に思わず見入ってしまう。

それに、この通りにある黄色いコンクリの塀で囲まれた民家にはいい匂いのする木がある。それが何の木なのかは塀の中に隠れていて全く分からないが、歩道の頭上に飛び出している枝の下を通ると、柑橘系のしつこくなくて甘い匂いがする。リュックで蒸れた肩や、背中にシャツが張り付いて気持ち悪いのを忘れさせてくれるその爽やかな匂いが好きだ。

すぐ先に黄色の塀が見えた、車道から歩道に乗り上げる。マスクを上唇までずらし、息を吐き出す。そして枝の下を通過すると同時に思いっきり鼻から吸い込むと、求めていた心地良さに全身が満たされた。自然と顔が綻んでしまう。この匂いに包まれると、部活終わりの汗ばんだ身体も気にならない。初夏の良い部分を残らず寄せ集めた何かに触れた気分だ。

黄色の塀が終わり右に曲がる、下り坂に差し掛かった所で車道に出る。人や車がいつ現れるか分からないが、そのスリルさえも坂道下りの醍醐味な気がする。マスクを顎までずらし、さっきの良い匂いを鼻先に残したままブレーキをせずに勢いよく下る。加速する二輪、シャツが膨らむ。「流れるような風景」とはきっと、このことだなどと思う。こんなにスピードを出していても、顔に受ける風はいつも優しい。

後ろから車の走る音が聞こえた。仕方なく、減速して歩道に乗り上げる。ブレーキを握っては離すを繰り返し、ゆるゆると自転車を走らせ、坂道の終わりの丁字型に直結している大通りをそのまま左に曲がる。背の高い街路樹沿いを、木陰を踏むように小さく蛇行しながら進む。すると、少し先の横断歩道の所に自分と同じクラブバッグが見えた。赤信号待ちをしているあの自転車は、体の大きさからして恐らくきのしーだ。少し速く漕げば追いつくが、このままなら、信号の変わり目できのしーには追いつけないだろう。

自分は、加速をすることにした。あと二週間で引退試合、一ヶ月後にはもう引退しているだろう。きのしーたちと、あとどれぐらい同じ部の部員でいられるだろうか。

サドルから尻を浮かせてリズム良く漕ぐ、クラブバッグにだんだんと近づいていく。あと少しで追いつける距離になった時、信号が青になりきのしーが漕ぎ出した。ここまでして追いつけないのは癪で、急いで立ち上がって後を追う。

「木下！」

声をかけると、きのしーは道の端に自転車を止め、ゆっくり振り返り、こちらに向かって手を上げた。減速して自転車を並ばせ、一緒に漕ぎ出す。

「佐竹とこの道で会うの久しぶり。」

「確かに。前はよく会ってたね。」

少し速く漕ぎ前に出て、すれ違う自転車を避けながらきのしーが言う。

「だって佐竹、ピッチャー練で居残りするからさ。」

言われてみれば、去年の夏ぐらいから、きのしーと一緒に帰ることはなくなっていた。 昨

年一つ上の先輩が引退して正規ピッチャーになってから、部活動時間外にも自主練習をするようになったからだ。そう思うと、きのしーに追いついて正解だった。

「あっ、あとちょっとだ。」

ときのしーが声をあげる。

「ああ、あの焼肉屋??」

少し先に、白地に赤色で牛が描かれた大きな看板が見える。

「そう！店の前を通ると焼肉のタレのいい匂いがするとこ！あの匂い腹減るんだよなあ、ああ腹減った。」

「あの匂い、部活帰りの身には特にキツイよな。」

そう、きのしーの生えかけの坊主頭のつむじを見つめながら答える。

「自分らが1年の時にさ、打ち上げたのそこだったよな。」

土で汚れたクラブバッグに刺繍された「木下」の文字が、陽の光で鈍く光っているのを見ながら聞く。

「あーそうだった。自分たちの打ち上げはさ、もっと良いところにしようぜ。」

「食べ放題はマストだな。」

きのしーは振り返り、こちらと目を合わせてにやりと笑った。

「もちろん！……ああ腹減った！」

焼肉屋の前を通り過ぎながら、きのしーが大きな声で喚く。

店から出ている白っぽい煙が顔に直撃し、炭と焦げた肉と甘辛いタレの匂いに包まれる。腹が減る匂いだ。けれど、ずっと嗅いでいたくはない。この煙をくぐると、自分の身体や着ている服が汚いものに塗れてしまったような気がしてくる。思わず、少し顔をしかめる。

その時、きのしーが何かを呟いた気がした。車道を通って行ったバイクの音に掻き消され、上手く聞こえない。

「何？何か言った？」

きのしーは一度振り返り、漕ぐ速度を落として自転車を斜めに並ばせた。

「佐竹は、この匂い嫌い？」

ドキッとす。妙に慌ててしまい、早口になる。

「いやそんなことないよ、腹が減った帰り道のご褒美っていうかさ。」

木下の方を見る。が、この角度からだと表情が見えない。

「そっか、たしかに。俺もあの店の前を通るのが通学路の一番の楽しみだわ。」

と、きのしーさゆっくりと丁寧に行った。自分は表情だけ笑顔になり、同調する。

「うん。」

前を走るきのしーの自転車が止まった。自分も、反対側に続く信号機の足元で停止する。ちらっときのしーの顔を見ると、眩しそうに向こう側の信号機を見つめている。視線は一向に合わない。話しかけてもいいだろうけど、話しかけたくないような、話すのが億劫なような、そんな気分になる。自分たちは一言も話すことなく、ひたすら信号が青に変わるのを待

った。とてつもなく長い時間に感じた。

狭い歩道の中をゆっくり進む、後ろからカラカラとゆっくり回るチェーンの音がある。きののしーの低い落ち着いた声が背後から聞こえる。

「お前さ、普通に練習してるけど、肘はもう完治したの？」

「もう大丈夫。引退試合はしっかり投げられる、はず。」

「そっか、良かった。」

少しの間後、きののしーが続ける。

「やっぱ、佐竹か投げしてくれなきゃ締まんないからさ。」

部活を緩めているのは木下達の意識の低さでもあるだろ、と心の中で思ってしまう。

「ありがとう。」

聞こえなくてもいいと思いながら呟く。きののしーはまだ続ける。

「ヒロとも話していたんだけど、佐竹がピッチャーじゃなかったら、やってられなかっただろうなって。」

ヒロが？

「自分もショートとして、そう思うよ。」

ヒロが、本当にそう言ったのか？自分がピッチャーでなきゃ、やってられなかった、と。

「佐竹いつも、試合中つらそうだからさ、本当はもっと役に立ちたかった。」

ヒロは、自分のキャッチャーをされていてよかったと思ってきているってことか？自分を頼りにしてくれていたってことか？それなら、今日の“向いていない”発言は、自分を負担に、嫌に思ってしまった訳では無いのかもしれない。むしろ、あれに含まれていたのは、今まで自分のキャッチャーをし続けてくれ、自分をいつも支えてくれていたヒロの、このバッテリーに対する“お疲れ様”発言だったのかもしれない。

「だから、まあ、佐竹の肘が治ってきていて良かったよ。」

と、少しぶっきらぼうにきののしーは続けた。

「急にどうしたんだよ。」

安堵が込み上げてきて、笑いながらそう返す。きののしーは照れているのか、笑い声のトーンで、

「とにかく、引退試合頑張ろうぜ。」

と言った。うん、頑張ろう。二人で最後まで。

「それじゃ、ここ曲がるから。」

そう言うと、きののしーは赤信号待ちで自転車を止めた自分を後ろから抜かし、右に曲がった。

サドルから降りてハンドルに両肘をつき、ぼーっと赤く光るオジサンを見つめる。車通りもほぼない小さなこの道のこの場所に、信号機がある意味が分からない。けれど、今はなんだかこのうざったい信号を待ってあげてもいい気分だった。

後ろから荒い息遣いが聞こえて、自分の前を小学生ぐらいの男の子が通った。その子はき

のしーが曲がった方向に走っていった。自然と、そちらに目を向ける。道の先には、同級生らしき男の子二人組が歩いているのが見えた。走っている子が何か言ったのか、その二人は振り向き、その子に向かって手招きをした。三人は合流し、小学生らしい上ずった大きな声ではしゃいでいる。なんだか、懐かしい風景だった。あれくらい歳の頃は、友達に会うと嬉しくって、隣りに早く並びたくて、前を歩く背中を走って追いかけていた記憶がある。

どの角を曲がったのか、いつの間にか三人の姿は見えなくなっていた。顔を上げ、点滅している信号をゆっくり渡り出す。沈みかけの太陽が、この帰宅路を優しく照らしている。家まで、あと少し。